

特別展

支倉常長像と 南蛮美術

400年前の日欧交流



Portrait of Hasekura Tsunenaga
and Nanban Art;
Japan-European Exchange 400 Years Ago



2014年2月11日[火・祝]—3月23日[日] **TNM** 東京国立博物館 本館7室
TOKYO NATIONAL MUSEUM [UENO PARK]

ごあいさつ

安土桃山時代から江戸時代初期にかけては、南蛮貿易などを通じて日本とヨーロッパとの交流が深まりました。そのなかで、ヨーロッパの地に直接渡った数少ない日本人が支倉常長(1571～1622)です。支倉は今からおよそ400年前の慶長18年(1613)、仙台藩主伊達政宗の命により、のちに慶長遣欧使節と呼ばれる使節団の代表としてヨーロッパに渡りました。

支倉常長が渡欧中、ローマ教皇パウロ5世に謁見するため、イタリア・ローマに入市した際の姿を描いたとされる「支倉常長像」をこのたび特別に公開します。また、南蛮美術の華開くなか、ヨーロッパ人への興味関心やその文物への憧れを表わした「南蛮人渡来図屏風」、太平洋を渡り、メキシコなどを経由して渡欧した支倉の航路を彷彿とさせる「世界図屏風」(いずれも重要文化財)をあわせて展示します。これらの作品を通じて、400年前の日欧の文化交流に想いを馳せていただく機会となれば幸いです。

Greeting

From the mid-16th to the beginning of the 17th century, during the Azuchi-Momoyama and the beginning of the Edo periods, was a time of encounters between Japan and Europe. Hasekura Tsunenaga (1571–1622), one of the few Japanese who actually traveled to Europe, was the leader of delegates which later became to be known as the Keicho Mission sent by the feudal lord of Sendai, Date Masamune, in 1613 (Keicho 18).

This exhibit features a portrait of Hasekura Tsunenaga, which is a portrayal of Hasekura in Rome when had an audience with Pope Paul V. Together with the portrait, *Europeans in Japan*, as well as the *Map of the World*, a work reminiscent of Hasekura's travel route across the Pacific Ocean and beyond Mexico, are also introduced. These two works are examples of Nanban Art, a style of Japanese art which flourished with influences from European culture. This exhibit aims to present an aspect of cultural exchanges between Japan and Europe four centuries ago.

特別展 「支倉常長像と南蛮美術－400年前の日欧交流－」

平成26年2月11日(火・祝)～3月23日(日) 東京国立博物館 本館7室

主 催 東京国立博物館

特別協力 文化庁、イタリア大使館

協 力 仙台市博物館

Organized by Tokyo National Museum

With the Special Support of the Agency of Cultural Affairs and the Italian Embassy

With the Assistance of Sendai City Museum



支倉常長像 アルキータ・リッチ 1面 キャンバス・油彩 17世紀 196.0 × 146.0 cm イタリア・個人蔵（表紙とも）

Portrait of Hasekura Tsunenaga, By Archita Ricci, 17th century, Oil on canvas, Private collection

支倉常長像 ヨーロッパが見た日本一

支倉常長と慶長遣欧使節

今からおよそ400年前の慶長18年(1613)10月、サン・ファン・バウティスタ(洗礼者聖ヨハネ)号と名付けられた一隻の洋型船が、宮城県石巻市の月浦を出港しました。彼らが目指したのは遙か海原の向こうのヨーロッパ。当時スペイン領だったメキシコとの交易許可を得るために、仙台藩主伊達政宗より派遣されました。後に「慶長遣欧使節」と呼ばれたこの使節団の代表を務めたのが支倉常長です。

太平洋を渡り、メキシコを経て、大西洋を進むこと約1年、ついにスペインの首都マドリードに到着します。そこで支倉はスペイン国王フェリペ3世に謁見し、さらにイタリア・ローマで、教皇パウロ5世に謁見しました。一行は約3年間ヨーロッパに滞在し、帰路はメキシコ、フィリピン、長崎を経由して、元和6年(1620)9月、仙台に戻ります。

江戸幕府による鎖国・禁教政策が進むなか、この使節の主要目的であったメキシコとの交易許可を得ることは叶いませんでした。ただ、支倉は日本からヨーロッパへ派遣された最初の外交使節であり、ヨーロッパの地に立った初めての「武士」でした。

400年前のヨーロッパが見た最初の「武士」

慶長遣欧使節の到着からおよそ30年前。天正遣欧少年使節と呼ばれる4人の日本人がヨーロッパを訪れています。この使節団も支倉と同じようにスペイン国王、ローマ教皇に謁見していますが、彼らは日本でキリスト教の教えを受けたイエズス会士であり、「東方のキリスト教徒」としての待遇でした。対して支倉は通商を求める外交使節であり、しかもヨーロッパが見た最初の「武士」の姿でした。

1615年10月29日、支倉ら一行のローマ入市式が挙行されます。教皇庁の近衛兵らに先導され、多くのローマ市民の大歓声のもと、白馬や馬車に乗った一行が市街をパレードしました。記録に拠ればその時の支倉のいでたちは、襟飾りをつけ、白地の絹に金銀の糸で鳥獣や草花をあしらったものを着て、黒の帽子を被っていたといいます。その際の姿を描くとされるのが「支倉常長像」です。

支倉常長像 ローマを行く「伊達男」-

この肖像画のまず注目すべきはその大きさです。支倉をほぼ等身大で描くもので、当時の王侯の肖像画にも比肩するものです。支倉は右手をテーブルに置き、左手を腰に当て、右半身に重心をかけています。このポーズも、当時のヨーロッパの王侯肖像画の型を踏まえるもので、坐像を中心の、同時代の日本の肖像画ではまずお目に掛かれないものです。

次いで彼のいでたちを見てみましょう。腰には鮫皮の脇差と、伊達家の紋である「九曜紋」の鍔をつけた刀を差しています。薄模様の小袖と袴は金銀糸などで飾られ、その上に羽織る胴服には、鹿や孔雀の羽のようなものを中心に、襟から袖口にかけては草花紋と、鮮やかな青や金のラインが走ります。このきらびやかな装束一式は、政宗から下賜されたものとみられています。まさに「伊達男」と呼ぶにふさわしいいでたちです。

また、テーブルの上には入市式の際に被っていたとされる帽子が置かれ、足先には、ヨーロッパ製の金唐革と思われる素材で作られた足袋が見えます(A)。さらに小袖の下にはレースのあるヨーロッパ風のシャツを着ているようで、襟元と袖先からその一部が見えています。まさに「和洋折衷」のこの姿で、支倉はローマを行進したのでした。

支倉のまわりのモティーフにも目を向けてみましょう。足下には、西洋絵画では「忠誠」「忠義」を表わす犬が首をややかしげてこちらを見つめます。背後のカーテンには、「逆辻に違ひ矢」という支倉家の紋が、ヨーロッパの紋章によく見られる宝冠とともに描かれています。

めくられたカーテンからのぞく窓の向こうには海原をゆく一隻の船が見えます。祝砲を放つこの帆船の船首には伊達家の「九曜紋」が、マストには支倉家の「逆辻に違ひ矢」が確認でき、支倉が乗ってきたサン・ファン・バウティスタ号を描いたものとみられます。

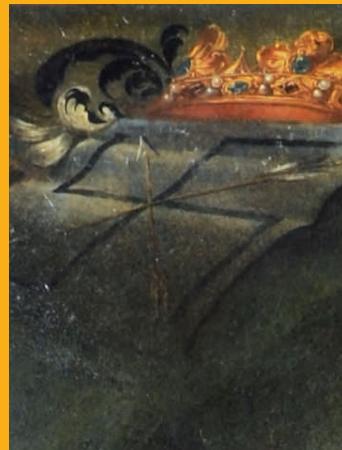
その上部の空には、キリスト教で「聖霊」を表わす鳩のもと、「信仰」の寓意である十字架を持つ女性像を中心に、右側には「希望」の寓意である錨を持つ女性像、左側には支倉と同行したフランシスコ会の祖である聖フランシスコと思われる聖人が描かれます(B)。錨は航海の安全の寓意ともとらえられ、千波を越えてやってきた支倉を言祝ぐモティーフが画面に散りばめられています。

キャンバスに油彩で描かれた、どこからどう見てもヨーロッパの絵画。そこに日本の武士が描かれているという、なんとも不思議な印象を受けます。ヨーロッパが見た最初の日本の武士の姿は、東方からの使者の到来という歴史的な事件を記録に留めるため、またヨーロッパの異国趣味(エキゾチズム)、とりわけ東方趣味(オリエンタリズム)を満たすため、細部までも詳細に、そして入念に描かれたのでした。

この肖像は、ローマでの支倉の世話役でもあったボルゲーゼ枢機卿が描かせたもので、枢機卿の別荘に伝えられました。この地がボルゲーゼ美術館となった今でも、400年前の日欧交流を示す「生き証人」として、ここで大切に保管されています。



カーテンの紋章



「伊達男」の面構え



ローマ入市の際には45歳の支倉。壯健の相ですが、髪の生え際には白髪が見えます。鬚は確認できませんが、冠などを被らないのは日本の肖像では異例のもの。まさにヨーロッパスタイルの肖像画と言えます。口をやや開き歯を見せているのは、画家の前で慣れないポーズを求められた折の、はにかみともいうべき表情を表わしているのでしょうか。

B
聖人



装束—鹿と薄模様



犬



西洋絵画では「忠誠」「忠義」を表わす犬。女性とともに描かれる際には夫への「貞節」などを表わしますが、男性とは狩猟の場面などで描かれるものです。スペイン国王臨席のもと洗礼を受けた支倉の、神への「忠誠」を示すものなのか、あるいは外交使節としての、君主への「忠誠」を表わしたものなのか。謎を秘めたモティーフです。

A
足袋



支倉の着す装束の中心的モティーフは鹿と薄です。これらは日本では秋を表わす景物です。そして支倉のローマ入市式が行なわれたのは、旧暦では秋である9月にあたります。もしかしたら支倉は晴れの儀式にそなえていくつかの正装のセットを持参し、日本の衣服の慣例に従って、この装束をまとったのかもしれません。

南蛮人渡来図屏風 一日本が見たヨーロッパー

16世紀半ば以降、多くのヨーロッパ人が日本に来航しました。初めて出会う「異国」の人びとの姿かたちに大いなる関心が寄せられる一方、彼らがもたらすヨーロッパやアジアの文物は、富の象徴として、また異国への憧憬を表わすものと

して珍重されました。

この「南蛮人渡来図屏風」は、右左隻を一つの連続した画面として、「黒船」と呼ばれたヨーロッパ船が来港し、「南蛮人」と呼ばれたヨーロッパの人びとが日本の地を進む様が



世界図屏風 一日本が見た世界一

中世までの日本の对外觀は、佛教的な世界觀に基づく「三国」観でした。てんごく　しんたん　ほんぢや天竺・震旦・本朝という、今日で言うインド・中国・日本を中心とする三つの地域によって世界を認識しようとするものです。ヨーロッパ人の到来は、この世界觀を根底から揺さぶり、新たな世界認識を日本にもたらしました。

スペイン、ポルトガルを画面の中心に据えたこの「世界図屏風」。この段階でヨーロッパ人に「発見」されていないオーストラリアや南極大陸は完全な形で描かれていません

が、ここに描かれた「世界」は、当時のヨーロッパ人によって把握されていた世界の姿です。このような世界図は、絵図や地球儀など様々な形をとって、ヨーロッパから日本にもたらされました。この新しい世界の姿は、場を荘厳する屏風の画題として選ばれたのでした。

注目すべきはこの図に引かれた朱線。帆船とともに引かれたこの線は、支倉常長が旅した航路とも重なるものです。400年前の私たちの祖先が見た「新しい世界」が、ここに表わされています。



描かれています。右隻には大きな寺院とともに、南蛮寺を思わせる建物も確認できます。おおむね右から左へと季節や時間が流れる通常の日本絵画とは異なり、画面左手から順に物語が進行していますが、西洋の画法ではなく、やまと絵の

技法を主として描かれた純然たる日本の絵画です。

このような「南蛮屏風」は、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての異国趣味を反映し、数多く描かれました。400年前の日本が見た「憧れの異国」の姿が、ここに留められています。



上:重要文化財 **南蛮人渡來図屏風** 6曲1隻
安土桃山時代・16世紀 紙本金地着色 各154.3×363.0 cm 個人蔵

Above:
Europeans in Japan / Pair of six-fold screens, color and gold on paper / Azuchi-Momoyama period, 16th century, 154.3 x 363.0 cm each / Important Cultural Property / Private collection

左下:重要文化財 **世界図屏風** 世界及日本図屏風のうち6曲1隻
安土桃山～江戸時代・16-17世紀 紙本金地着色 154.4×360.2 cm 個人蔵
Below:
Maps of the World and Japan / Pair of six-fold screens, color and gold on paper / Azuchi-Momoyama - Edo period, 16th-17th century, 154.4 x 360.2 cm each / Important Cultural Property / Private collection
On exhibit: **Map of the World** (below left)

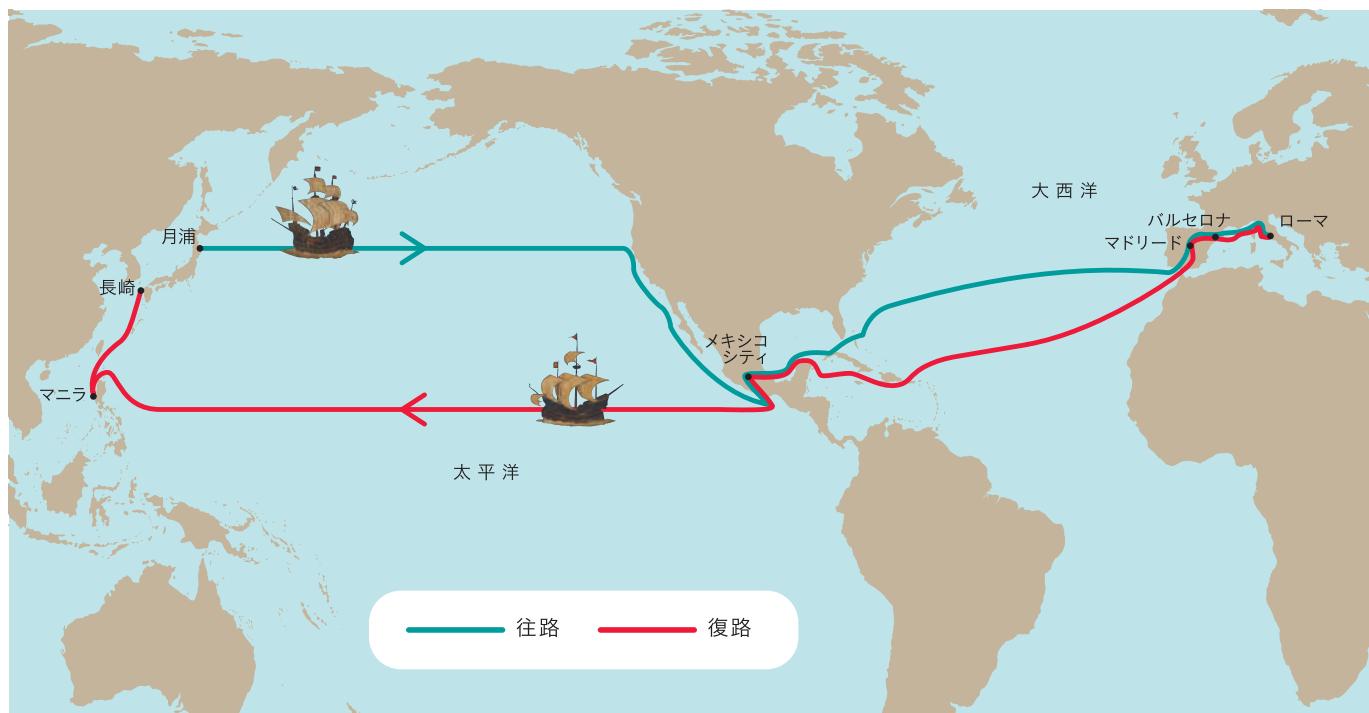
下:〈参考〉世界及日本図屏風のうち日本図屏風

織田家伝来の由緒を持つ屏風

金雲の合間から、北海道を除く日本の姿を描く「日本図屏風」。奈良時代、行基が作ったとされる「行基図」に基づく日本図です。この日本図屏風は世界図屏風と一隻を成していますが、本展出陳の「南蛮人渡來図屏風」とともに伝来しました。これらの屏風は慶長5年(1600)の関ヶ原合戦の折、西軍についた織田秀信(信長の孫で忠信の子、三法師)の籠もる岐阜城から、池田輝政が分捕ったとの伝承があります。もしかしたら、かの織田信長由来の伝世品なのかもしれません。



400年前の日欧交流 ー新しい「世界」との出会いー



2つの大洋を渡った支倉常長の行程図

参考：「伊達政宗の夢—慶長遣欧使節と南蛮文化」展図録 仙台市博物館 2013年

ヨーロッパ人によって進められた「大航海時代」。「地理上の発見」が相次ぐなか、かつてない急速な「世界の一体化」が進んだのがこの時代です。その中でも、最後にヨーロッパ人に見出された地域の一つが東方の島国・日本でした。以後ヨーロッパからは、キリスト教宣教師をはじめとする多くのヨーロッパ人が日本を訪れました。

いっぽう日本では、南蛮貿易などを通じて、新しい「世界」であるヨーロッパとの交流が深まるなか、江戸幕府が鎖国政策を推進することで、以後幕末にいたるまで世界との交流は限られた地域とのみ行なわれることとなりました。2つの大洋を渡った支倉の偉業も、公的な歴史からは忘れ去られることになります。明治維新後の1873年、岩倉使節団がベネチア

を訪れた際、約250年前にヨーロッパに渡った日本人がいたことを初めて聞かされ、驚愕したといいます。

ヨーロッパ人が初めて日本に到来してから支倉が渡欧した70年ほどの限られた間、日本では新たな世界との出会いに戸惑いつつも、その文物や知識を貪欲に吸収しました。その間には、ヨーロッパ人画家によって、堂々たる武士の姿をとらえた「支倉常長像」がイタリアの地で描かれるいっぽう、日本人画家によって、世界を見つめる「南蛮人渡来図屏風」や「世界図屏風」が描かれたのです。

およそ400年前に交わされた日本とヨーロッパの交流。その軌跡は、今なお残る美術作品を通じ、現在に生きる私たちに強いメッセージを発しています。

観覧料：

本特別展は総合文化展料金でご覧いただけます。
600円(500円)、大学生400円(300円) ※()内は20名以上の団体料金
※高校生以下および満18歳未満、満70歳以上の方は無料です
(入館の際に年齢のわかるものをご提示ください)。
※障がい者とその介護者1名は無料です
(入館の際に障がい者手帳等をご提示ください)。

交通：

JR上野駅公園口、鶯谷駅南口から徒歩10分
東京メトロ上野駅・根津駅、京成電鉄京成上野駅から徒歩15分

平成26年2月11日発行

執筆 土屋貴裕（東京国立博物館）
写真提供・撮影 仙台市博物館／長谷川恵（東京国立博物館）
翻訳 遠藤栄子（東京国立博物館）
編集・発行 東京国立博物館
〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
電話 03-3822-1111(代表)
<http://www.tnm.jp/>

デザイン 田辺智子
印刷 株式会社アイワード

©2014 東京国立博物館 Tokyo National Museum
※禁無断転載・複製

